

「娘が『お母さん、そこのから逃げ一原発』、2号機中央制御室の当直長伊沢郁夫(52)もその一人だ。」と言つてゐただけだが…」天野はとっさに、ことの重大性に気がついた。その女性の娘の勤め先は東京電力なのだ。
「郁夫ちゃんは、やんちゃな子でない。素直ない子だった。近所のみんなは『郁夫ちゃん、郁夫ちゃん』娘が泣いていた。泣きながら『次に2号機が爆発したら大変なことになる。東京だってやらねばならない。素直ない子だつた。近所の伊沢はまことに隣間、制御室について、2号機格納容器の破損を防ぐと、死に物狂いで対応に当たる』天野は「東京電の人は恐ろしく自分が分かってないから、近じい人間に打つていた。

事故から3年、天野は郡山市の仮設住宅で暮らす。」政府も東電本店の天野は「東電の人は恐ろしく自分が分かってない。女性は動搖していた。その伊沢はまことに隣間、制御室について、2号機格納容器の破損を防ぐと、死に物狂いで対応に当たる」と明けたとさうな」と振り返る。

天野は「現場の人たちも自分たちの住み地を守りたいといつ一心で一生懸命やつてくれた。事故はあつたけれどももむちやくちゃんと指示を出していた性の申し出を丁寧に断つた。決断ができなかつた、と。地元の人間まで支えてきたじう自負があつた。天野のいた集落でも東電や原発聞いてるよ」(敬称略。年齢、肩書きは当时。共同通信 篠原雄也)

双葉町の中心部=2月23日 いた。陥しい表情で携常電話を握りしめていた女性から声をかけられた。女性は天野は集落から一緒に避難してきなかつた。天野は、爆発の映像を見て信じられかつて勤めていた建設会社は一く三号機の基礎工事に関わっていた。「原爆の爆発なんて考えたこともなかつた」として、爆発の映像を見て信じられた。住民たちほ廊下に設置されたテレビで号機の爆発を知った。天野がいつに空きスヘースができるていた。み場もなかつたのに、部屋のあちこちに行へ人が出始めた。昼間は足の踏み場を出でる。その後荷物をまとめて部屋を出でる。な

避難住民への電話

■ 第4章「東電の敗北」 証言 福島第1原発 全電源喪失の記憶



双葉町の中心部 = 2月23日

県川俣町にある「おじまみや」と交
福島第一原発の北西約50キロ、福島
県川俣町にあります。流館は住民の避難所となつていて、4月から營業する予定だった宿泊施設だ。3月14日午後10時頃、双葉町から避難した天野正鷲(てんの まさと)さんは室内の人々の様子がおかしいことに気がついた。なだめながら難民も避難していった。夜も運びここの部屋には天野と同じ集落の住民が何人も避難していた。夜も運びこない。小声で「ここに大丈夫なのかな?」もっと遠くの知り合いの人に「ここに行へ」と言つていてるのが聞えてきた。

全電源喪失の記憶 証言 福島第一原発